

| | | |
|---------------|------|-------------|
| 早稲田大学博士論文(概要) | | |
| | 学位記 | 文科省報告 |
| 2007 | 4611 | ① 乙 2498 |

概要

『源平盛衰記』研究

— その叙述の方法と意図 —

羽原 彩



「概要」

一 目的

盛衰記は『平家物語』諸本における最終増補本として位置づけられて以来、一九八〇年代までは出典研究や記事の膨大さのみ目が向けられ、具体的な叙述の有り様について検討されることが余りなかった。叙述について論じられる場合は、膨大な叙述がなぜ生まれただのか、という点にのみ光が当てられ、物語世界を解体していく方向性においてとらえられる場合がほとんどであった。しかし一九八〇年代以降には、盛衰記に全体を見通す一定の叙述意識が見出だされるようになり、近年では盛衰記の叙述について『平家物語』世界を新たに解釈し、歴史を独自の視線で再構成した、創造的な営為として肯定的に捉えられることが多い。

本論文も、そのような最近の研究傾向の中に位置づけられるものである。盛衰記は確かに多様な説話や異伝を収載し、拡散の様相を示しながらも、しかしそれらをも含みこむかたちで、物語世界を一定の方向へと進行させていく。盛衰記の叙述に関して、説話集的な方法が用いられている、あるいは知識を集積して示そうとするといった一面が指摘されるが、それらが分散してしまうことなく、盛衰記が一つの作品として存在しつづけたことを考えれば、何らかの求心力がそこにはたらいているのは明らかである。その求心力とは、盛衰記を通して「何か」を描き出そうとする意識、つまり、叙述意識にほかならないだろう。盛衰記が「何を」描き出そうとしているのか。これについては従来、『平家物語』であることが自明のことと考えられ、久しく検討されることはなかった。しかし、『平家物語』を描き出そうとするのなら、すでに存在していた『平家物語』をそのまま引き写すのがもつとも合理的である。にもかかわらず、盛衰記はそうすることをせず、記事を増補し、記述を改変して、それまでとは異なる『平家物語』を創り出そうとしたのである。それは、盛衰記が描き出そうとした、「それまでとは異なる『平家物語』」とはどのようなものであったのだろうか。盛衰記は「何を」描き出そうとして、『平家物語』に書き換えや編集を施したのだろうか。

本論文は、このような問題意識のもとに、盛衰記が「何を」描き出そうとしているのか、またそのために盛衰記がどのような方法をとっているのか、ということ明らかにすることを目的とするものである。そのための手段として、個別の事件や、特定の人物に対する盛衰記の叙述について、主に延慶本と比較し、検討していく。

これまでの盛衰記に叙述意識を見る研究の多くが、全体像を通して論じるがために、大まかな叙述の流れを追うものであったり、あるいは盛衰記が独自に載せる漢籍などの位置づけられ方から叙述意識を探るものであった。もちろん、総体的に盛衰記叙述のあり方を把握することが、もつとも求められるべきことである。しかしそれは、個別の事件を描くある程度の記事のまとまりから見出だされる叙述方法や、特定の人物に向けられる叙述のあり方を積み上げることによって、浮かび上がってくるのではないだろうか。このような認識のもとに、本論文は個々の事件や、人物についての記事を検討の対象とし、これらを描き出す盛衰記の叙述がどのような意図のもとに、またどのような方法を用いて創り上げられたのかを検討していく。

また、盛衰記の特徴は、先に述べたように、先行する『平家物語』本文を受け継ぎながら、これに改変を加えて、新たな叙述を創り出していくことにある。このことは、逆に言えば盛衰記が拠った『平家物語』本文と比較することで、再構成の過程を明らかにすることができるとを示している。現存する『平家物語』諸本は、いずれも盛衰記と直接関係にあるとは認められないが、本論文で検討した範囲に限って言えば、延慶本に近い本文を下敷きにしていると考えられる。そこで、本論文では盛衰記の叙述の独自性と、叙述が再構成されていく過程と、それぞれを明らかにするために、主に延慶本を比較の対象として用いる。

叙述のあり方は、盛衰記が置かれていた歴史的、社会的な環境も反映されている。本論文の遠い見通しとしては、歴史を切り取る盛衰記の叙述のあり方が、どのような認識の上に立つものであるのか、どのような環境のもとで成立したのかを解明することを課題としている。そのための基礎的な作業として、個別の叙述のひとつひとつを検討していきたい。

二 構成と内容

それでは本論文の構成と内容について述べる。

第一章では、平氏に対する源氏の挙兵を取りあげる。早くに津田左右吉（『平家物語と源平盛衰記の関係に就いて』『史学雑誌』一九一五・七）が指摘し、また『源平盛衰記』という題名からも明らかのように、盛衰記には源氏に関する記事が多く掲載されている。これは、盛衰記と同じく頼朝挙兵譚を有している延慶本などと比べても、たとえば頼朝挙兵譚自体が延慶本よりさらに増補されていることに示されるように、明らかであると言える。このことはすなわち盛衰記に、源氏の動きに注目し、これを描き出そうとする意識があったことを示している。それでは、源氏に関する記事をどのような意図から叙述しているのか、そのためにいかなる方法を用いているのか。かかる問題意識から、高倉宮・頼政挙兵事件、頼朝挙兵、義仲挙兵の叙述のあり方を取りあげて検討していく。

第一節は高倉宮・頼政挙兵事件について論じたものである。ここではまず、高倉宮・頼政挙兵事件が、盛衰記においては帝位篡奪の企てとして強く打ち出されており、また、これが全国の源氏を動員する大がかりな挙兵としてとらえられていることを指摘した。このことから、この挙兵事件が、帝位を安徳から高倉宮へと移すとともに、朝家を守護する立場も平氏から源氏へと交替しようとしたものとして、源平を対比的にとらえる枠組みの中で叙述されていることを明らかにした。さらに、頼朝挙兵とも対比する姿勢が見られることから、この挙兵事件においても頼朝を引き出そうとする盛衰記の意図を読み取った。その上で、盛衰記が作り上げた全国の源氏を巻き込む大がかりな源平の交替劇という枠組みと、ほとんど軍勢を集めることのできなかつた実際の挙兵事件との間が、「將軍」頼朝の不在に帰して埋められていると結論づけた。

続く第二節は頼朝挙兵譚を描く盛衰記の叙述方法を論じたものである。ここではまず、早馬や東国の状況を知らせる使者を利用し、また記事の配列を変えることで、盛衰記が挙兵譚に源氏と平氏による軍勢の取り合いという独自の状況を設定していること、取り合う軍勢の具体相として武蔵、相模の武士たちが取りあげられていることを指摘した。そして

これらの設定によって、軍勢の付く源氏と付かない平氏が対比的に叙述されていることを明らかにした。次に、頼朝が東国の軍勢を集めるために後白河院の院宣を誇示していることを見出だし、これが権威の象徴として名目的に用いられていることを読み取った。対して一方の平氏の側では、東国追討使の背後で高倉院の官符の存在が強調されており、追討使には高倉院の権威が負わされていると分析した。ここにおいて、挙兵譚に源氏―院宣―軍勢が付く、平氏―官符―軍勢が付かない、という対比構造が作り上げられ、この枠組みに沿って物語世界を進めていくのが、盛衰記の叙述方法であると結論づけた。

第三節は義仲の挙兵について検討したものである。まず、北国の義仲と、東国の頼朝の動きが、盛衰記では区別されていることを指摘し、軍勢をめぐる叙述などから、義仲が頼朝と意識的に対比されて描き出されていると述べた。次に義仲の生い立ちに東国から阻害される存在としての位置づけを読み取り、それが頼朝との不和までつながっていくことから、義仲と頼朝が常に対立を孕む関係性においてとらえられていることを見出した。また、義仲に対して、八幡殿の後胤として平氏を倒し、世を治めるべきものという、頼朝と同じような位置づけがなされていることを読み取り、頼朝との対立は源氏一門の中でさらに分類される「家」同士の対立の中に組み込まれていると見た。さらに、盛衰記は義仲が征夷将軍になったと記しながら、「日本ノ將軍」と位置づけることはなく、滅んでいく過程においては「北陸ノ大將軍」としての側面が強調されていることから、義仲の〈滅び〉を北国という地域性によって説明しようとしているのではないかと考察した。

第一章を通して見いだせるのは、軍勢の数に注目し、源氏と平氏、あるいは頼朝と頼政、義仲を対比的にとらえる枠組みを作り上げ、それに沿って物語を進行させていく叙述のあり方であった。しかし、これらは単に同じパターンの繰り返しとはとらえられない。頼朝、頼政、義仲の三者は、同じような枠組みの中で語られながら、頼政は軍勢を従えることができず、義仲は「北陸ノ大將軍」にしかたななかった。彼らから逆照射され現出するのは、多くの軍勢を従える「日本ノ大將軍」の頼朝である。こうしたことを考えれば、このような枠組みが単なる叙述の定型化というレベルにないことは、自ずと知られよう。盛衰記は源氏記事について、独自の枠組みをはめ込むことで、源氏における頼朝の優位性を打ち出しているのである。

第二章は盛衰記の叙述のあり方から、一定の歴史認識を見出だそうとするものである。主に頼朝と清盛について取りあげ、それぞれに対して向けられる特有の視線を叙述からあぶり出し、それがどのような認識のもとでなされたものなのか、また、そうした認識がどこから生まれてくるものなのかについて検討を加えた。盛衰記における頼朝や清盛のあり方については、榊原千鶴氏『源平盛衰記』の頼朝（『日本文学』42・6 一九九三・六 ↓『平家物語 創造と享受』へ一九九八・十 三弥井書店）所収）や鈴木彰氏『源平盛衰記』における頼朝の地位―編集姿勢と挙兵譚からの脈絡をめぐって―（『軍記と語り物』37 二〇〇一・三 ↓『平家物語の展開と中世社会』へ二〇〇六・二 汲古書院）所収）、同氏前掲『平家物語の展開と中世社会』第二部第二編第三章「頼朝鎌倉入り」の意義づけ―『平家物語』から『源平盛衰記』へ―」などですでに論じられるところであるが、これらの先行研究の成果によりながら、両者を〈過去〉から続く歴史の中に位置づけようとする盛衰記の歴史認識の一端をとらえていきたいと考えたものである。

第一節では、頼朝挙兵譚における義家叙述を取りあげた。この論は盛衰記の挙兵譚にお

いて、頼朝を義家以来の源氏の〈過去〉から逆照射してとらえようとする姿勢が見られることを指摘するものである。その根拠として、頼朝が義家の血統を受け継ぐ正嫡の源氏として位置づけられ、東国武士たちの関係も、義家以来の「重代」「相伝」の主従関係の延長線上でとらえられていること、挙兵譚において頼朝自身が義家のイメージを投影されてその像を結んでいることを挙げた。その上で、頼朝に対して世に立つ「源氏大將軍」として見通す記述が繰り返されることから、頼朝挙兵譚が義家を始発とする〈源氏の物語〉の中に組み込まれていると論じた。

そして、盛衰記から読み取れる、源氏の祖として正嫡性を示すという義家叙述の機能について注目し、これが何に由来するものなのかを考察した。そこでは、『保元物語』、『平治物語』、『太平記』における義家叙述について検討し、『保元物語』、『平治物語』からは、古態本に少ない義家叙述が後出本では増加していること、またそれに伴い、義家叙述の果たす機能が盛衰記に近いものへと変化していること、『太平記』の義家叙述にも同様の機能が見いだせることを指摘した。さらに足利政権草創期において義家が重視されているとの先行研究を承けて、義家を源氏の正嫡の祖とする叙述が時代性を反映したものであり、盛衰記本文生成期を考える上での一つの指標となる可能性を提示した。

このような義家叙述の時代性についてさらに論じたものが第二節となる。まず盛衰記の義家叙述が頼朝に対してだけ見られるものではなく、頼政や義仲が挙兵する際にも、その資格を有していることを示すために利用されていること読み取り、これが源氏の正統を証明するものであることを確認した。その上で、南北朝期に成立した歴史書などに見える義家叙述を検討、そこに尊氏と義家、頼朝を同一の系統でとらえる認識が存在することを指摘した。このことから、義家を源氏の祖とし、頼朝、尊氏を同一系譜に位置づけるとらえ方が、当時の常識的な認識であったのではないかと考え、盛衰記の義家叙述もこれと同じような認識の上に立つものではないかと推察した。また、『梅松論』や『神皇正統記』が尊氏について評価する場合、頼朝を相対化して対比していることを見出だし、盛衰記終結部に描き出される頼朝のあり方が、これに通じる認識に支えられたものではないかと推察した。そして、頼朝に予言される〈滅び〉の後に源氏を引き継ぐものとして尊氏が意識されているのではないかと論じた。

第三節は清盛の位置づけについて論じたものである。巻二十「石橋合戦」において、清盛から頼朝へと「將軍」が移行したことが提示されることから、盛衰記には清盛がそれ以前に「將軍」であったとの認識が見いだせる。これと連動するように、盛衰記は清盛を「日本ノ將軍」と称することから、將軍としての清盛について検討していく。

まず、盛衰記は化鳥退治や日向通良追討などを朝敵退治と位置づけることで、清盛の將軍としての具体的なはたらきを描き出していることを指摘した。さらに、平氏の繁栄の理由として、朝敵追罰の勲功が繰り返され挙げられており、平氏が武士として朝家に仕えてきたという側面が強調されていることを読み取った。また、平氏重代の武器、「唐皮」「小鳥」の記事には、国を守るべき武器としての位置づけが見出だせ、これらの武器を受け継ぐ平氏にも武力を以て国家を守護するという役割が担わされていると考察した。そして、このような盛衰記の叙述から、將軍を抽象的な立場としてではなく、武力を行使してあらゆる朝敵から朝家を守る、実的なものとする認識を読み取り、清盛もその立場に置かれていることを指摘した。その上で清盛から頼朝へと將軍が移行する文脈が物語の中に創り

出されていると考えた。そして、武力を以て身を立てる將軍の立場の危うさが清盛を通して暗示されることから、次に將軍の役を担う頼朝の不安定な先行きも示唆されていると結論づけた。さらに、將軍のイメージを実際の武力を行使することで朝家に仕える者として把握する点に、盛衰記生成時の時代性が反映されている可能性を提示している。

第二章を通して、盛衰記がある時期に特有の視座から歴史を解釈し、それに基づいて再び新たな物語を作りだしていることが看取できたように思う。盛衰記生成当時の〈現在〉の視点で、〈過去〉を振り返るこのような記述は、〈過去〉を〈現在〉の視点で新たにとらえ直すものである。とらえ直された〈過去〉は、盛衰記の〈現在〉に対してどのような意味を持つのか、どうして〈過去〉を振り返る必要があったのか、そのような観点からも、さらに考察を深めていかなければならないと考えている。

第三章は畠山重忠の叙述を通して、人物造型のあり方について論じるものである。『平家物語』諸本と比べて、盛衰記では重忠が非常にクローズアップされている。その描かれ方が、単に理想化や誇張を進めただけなのか、あるいは何らかの叙述意識が見いだせるのかを考え、また『平家物語』以外の、中世に幅広く伝わる畠山重忠譚の中での盛衰記の位置づけを探ろうと試みた。

第一節では、盛衰記の重忠譚がどのように描き出されているかを論じている。重忠はその死後、『愚管抄』『古今著聞集』『吾妻鏡』などに理想化された姿が記されているが、それらの記述から共通要素を抽出し、延慶本に見える重忠像をこれと比較、これらにある程度共通した重忠に対する認識が見出だされることを確認し、これを初期の重忠譚の特徴としてとらえた。一方で盛衰記からは、初期の重忠譚とは異質な叙述のあり方が看取できる。盛衰記では、初陣の小坪合戦から宇治川渡河に至る過程において、重忠の成長を描き出し、また宇治川から鶴越、屋島へと至る過程では、頼朝を頂点とする東国武士の秩序から逸脱し、頼朝と同等の位置づけさえなされ、しかもそれが受け入れられる有り様が記されていることを指摘した。そして盛衰記には重忠の〈滅び〉を前提にした記述が見られるため、これが頼朝による誅伐を見越した記述であると推察した。かかる重忠譚の叙述から、盛衰記において重忠は初陣から〈滅び〉まで、生涯を見通して描き出されていると指摘した。

第二節は、第一節で指摘した盛衰記の重忠譚が、中世に様々な広がりを見せる重忠譚の中で、どのように位置づけられるのかを、主に仮名本の古態を示していると言われる太山寺本『曾我物語』との関係から検討したものである。

まず、太山寺本と真名本『曾我物語』における重忠譚の比較から、太山寺本にのみ見られる要素を抽出し、それが盛衰記においても共通していることを指摘した。さらに、同様の要素が、幸若舞曲やお伽草子の作品においても見出だせることを確認し、これが重忠譚の後代的な特徴としてとらえられることを提示した。これらのことから、重忠譚自体が変容していく過程を見出だし、そうした変容の中に盛衰記も位置づけられると結論づけた。その一例として示したのが、盛衰記の小坪合戦の記事である。小坪合戦で盛衰記が独自に創り出した初陣の重忠の様子が、『保元物語』『白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事』、『平治物語』『待賢門の軍の事付けたり信頼落つる事』における重盛の記述を参考にして描かれている可能性を指摘した。その一方で仮名本『曾我物語』では、重忠に重盛が投影されているとの指摘があることから、盛衰記のように重忠と重盛を同一視する視座が、仮名本

のような記述を生み出す基盤となったのではないかと推察した。

第三章で論じた重忠についての問題は、重忠譚固有の問題というレベルには留まらないように思える。その理由の一つは、初陣から（滅び）の兆しまでを描き出し、重忠のすべてを記そうとする盛衰記の強い叙述意識を見いだせるところにあり、もう一つは伝承世界の変容と盛衰記生成との関わりを一面として示しているところにある。前者については、重忠が頼朝と同じような地位に引き上げられていることから、頼朝の問題としてもとらえられるものであり、なぜ重忠がこのように位置づけられるかは、盛衰記全体を通観して考えていかなければならないだろう。後者に関しても、こうした重忠譚が、中世から近世まで広がっていく、重忠の伝承世界とどのように関わるのか、さらに検討を加えなければならぬ。しかし、すでに伝承の中にある人物を、盛衰記がどのように物語の中に位置づけていくのかという点においては、本論文でその一端を明らかにできたのではないかと考える。

以上が本論文の構成と内容である。